



|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | Paul Willis の文化研究における社会集団論                                                        |
| Author(s)        | 小西, 二郎                                                                            |
| Citation         | 北海道大學教育學部紀要, 65, 219-232                                                          |
| Issue Date       | 1995-01                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/29453">https://hdl.handle.net/2115/29453</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 65_P219-232.pdf                                                                   |



# Paul Willis の文化研究における社会集団論

小 西 二 郎

A social group in Cultural Studies of Paul Willis

Tsugio KONISHI

## 1 はじめに

Paul Willis は、*Learning to Labour*<sup>(1)</sup> の著者として日本でも広く知られている。彼の研究史には、motor-bike boys などのインフォーマルな社会集団に関する実証研究を行なったという“前史”がある。これまで日本では、こうした初期の研究が取り上げられることはほとんどなかった。しかしながらこれらの研究蓄積があるからこそ、彼は、*Learning to Labour* において対抗文化的再生産論を打ち出すことができたのだと考える。つまり、それらの研究を通して、社会集団の実態と文化を明らかにする方法論を構築したからこそ、〈野郎ども〉という反学校的な社会集団の文化が労働者文化の再生産の主体的契機となり、そのことによって結局はイギリス資本主義社会の再生産に予期せず与してしまう、言わば逆接の契機となると主張することができたのである。〈野郎ども〉は「落ちこぼれた」結果、仕方なく肉体労働の職種に就くのではない。逆に、積極的に肉体労働を選び取る。その過程で彼らの文化は、社会の矛盾に対する洞察 (penetration) を獲得するものの、同時に個人主義イデオロギーを拒むあまり精神労働一般までも忌避してしまい、精神労働と肉体労働の分断を容認するという制約 (limitation) もはらんでしまう。更に、上記の分業に対する肯定を強化するような、「ペン先の仕事は女々しいものだ」が、肉体労働は男性的だから社会的に優位だとする性差別による分断と、肉体労働のなかでもヒエラルヒーがあり、他民族がやるような「汚い」手労働以外が自分たちに相応しいとする分断という制約 (limitation) もはらんでしまう。こうして、‘them and us’ という日常性の可視的レベルから階級制を黙認するという労働者文化の限界性を彼らの文化が再生産することによって、資本主義社会を追認し再生産につながるというのである。〈野郎ども〉の文化がどのようにして洞察を獲得するのか、そして如何にして文化の内部に制約を生ぜしめ洞察に立脚した展開を阻ませてしまうのか、これらを解明するには *Learning to Labour* の内在的検討が必要となる。それには、彼の“前史”に目を向けて、文化研究としての社会集団論を明らかにして、その視点から *Learning to Labour* をとらえ直す必要があると考える。そこで本論文は、“前史”をなす研究蓄積の集大成である *Profane Culture*<sup>(2)</sup> を主に取り上げて、彼の社会集団論について検討することを課題とする。

彼は *Profane Culture* において、労働者階級に属する motor-bike boys と中産階級に属する hippies の二つの事例を取り上げている。本論文では、*Learning to Labour* との関連性をみるので、後者について検討する。彼がこの集団を対象としたのはなぜか。それにはまず、文化研究を志す彼にとって文化とはどういう概念なのかをみる必要がある。文化とは、芸術や洗練された事物との関わりだけでなく、むしろ日常生活のなかで形成される生きている文化 (living cultures) だという。文化に対するこのような定義は、Raymond Williams 以降のイギリスにおける文化研究 (Cultural Studies) の共通認識となっている。そして文化は、個人レベルあるいは社会秩序レ

ベルから発するのでなく、個々人の日常生活における様々な経験が社会集団で共有化されることから生じると Willis は考える<sup>(3)</sup>。それゆえ、文化の発生源としての社会集団に着目するのである。

では、社会集団の中でも motor-bike boys を対象としたのはなぜか。motor-bike boys は一般に、資本主義的なメディアや商業主義的な提供物に支配され、社会システムの底辺に位置付けられている、言わば「かも」(fall guys) であって、自前の文化を形成することは到底できないとみなされている。それに対して、この集団は、自らの文化を作り上げることに参加できるだけでなく、そうした文化が持つ「冒瀆的な (profane) 創造性は、ラディカルな文化変動が起こる唯一の手段なのだということ我々に示す」<sup>(4)</sup> と Willis は考える。すなわち、「直接経験や生活様式、創造的な行為、洞察——すなわち文化が、問題を再定義したり意味の均衡を破り、我々すべてに関わるいくつかの可能性を置き換えるのは、これらの場所 (=工場や街角、酒場、ダンス・ホール、高層アパートなど) において」<sup>(5)</sup> motor-bike boys の集団が行動することに端を発し、支配的社会から捨てられたり、単に利益を得るためだけに作られた冒瀆的な事物の中に新たな質や潜在性を開発することによってなされるのである(括弧内筆者)。つまり、冒瀆的な文化が持つ辛辣さ(the acid of profane cultures)こそが、ブルジョア的な秩序を浸食することができるというのである<sup>(6)</sup>。

こうして生きている文化(living cultures)は、自らを生み出した諸条件を理解するのみならず、自らの関心やアイデンティティを表現するために自らを取り巻く状況を利用する——そのことによって、存在条件をも部分的にはあれ変えることができると彼はいう。motor-bike boys の集団の文化は、存在条件との弁証法的な関係の中で能動的な営みを行なうということを意味しているといえる。しかしこうした理解や営みは、言語によって明瞭に示されるとは必ずしも限らない。むしろ文化のスタイルで現されると Willis は考える。そしてこのスタイルは、労働者階級文化の基本的な形態を表出するし、労働者階級にとって中心的な主題や価値を含むという<sup>(7)</sup>。彼らの文化のスタイルが、社会状況に対する労働者階級のある典型的な応答(response)だと Willis はみなしているといえる。

## 2 motor-bike boys 研究における社会集団と文化

彼は、the Triple-X という集団を対象として、イングランドのある大都市で 1969 年に 9 カ月に及ぶフィールド・ワークを行なった<sup>(8)</sup>。その集団は、10 代後半から 20 代半ばまでの 4 人からなる。彼らの仕事は、鋳物工場での作業や建築現場で足場を組む作業などであり、伝統的な肉体労働の職種といえる。この集団は、全体として 1 つのまとまりとなっているわけではなく流動的であって、メンバー以外の人たちが集団の行動に加わることもしばしばある。飾りボタンのついた皮ジャンやジーンズ、ブーツで身を包み、長髪にグリースを塗りたくった彼らは、普段、バイクに乗って疾走したり、コーヒースタンドにたむろしてピンボールをやったり、近所のパブで酒を飲み、ダーツに興じたりしている。

外観や行動、とりわけバイクで走り回る様からして、彼らは、一般社会、とりわけ中産階級の目には冒瀆的に映じ、秩序を持たぬ無法の徒にしかみえない。しかしそれは、あくまでも中産階級の価値規範に照らした場合の見方である。motor-bike boys の文化は独自の秩序を持つと Willis は考える。その内実を次にみることにしよう。まず、彼らのアイデンティティは何か。彼らは、自らの行為の力やそのコントロールを信頼している。つまり、現実に対する認識、それに立脚した決定と行為、思考とその具体的な表現について彼らは揺るぎない自己信頼(self-reliance)を有

しているのである。それが、彼らのアイデンティティの中核にある。例えば、バイクに対する態度にそれが端的に現われている。「バイクの狂暴性を包摂しコントロールすることを発展させるのは、明らかに、物的世界に対する制御が可能であり、その世界に対する認識があいまいでないという確信である——決してこの逆ではない」<sup>(9)</sup>。つまり、現実に対する認識と行為に対する自己信頼があるからこそ、狂暴な機械になり得るバイクを彼らは支配下に治めることができるというのである。彼らは、hippies とは対照的にドラッグを、そのような自己信頼を脅かすもの、すなわち現実認識とそれに基づく行為を鈍らすものだみなし忌避する。

自分たちこそが、現実をしっかりと把握しており、かつそれに即応した行為をとることができるという自己信頼を核としたアイデンティティは、荒っぽさや大胆さ、剛胆さを尊ぶ男らしさ (masculinity) のスタイルで表現される。先に述べた彼らの外見も男らしさを前面に出している。服装やバイク用具は剛胆なものに見えるし、ブーツは工場を連想させる。長髪は、「初期の Elvis Presley のイメージが示す共示義 (connotations) を利用」<sup>(10)</sup> して、攻撃的で尊大な男性の優位を現わす。しかも彼らの間では男らしさのスタイルは、「『自らをうまく操縦する』 (handling yourself) という概念、すなわち、とてもフィジカルであり怖じ気づかせることさえある実利にさとい世界のなかで、迅速かつ大胆に行動するという概念である程度理解されている」<sup>(11)</sup>。つまり、単に外見だけでなく行動様式をも律する価値として男らしさ (masculinity) が彼らの間で意識されているのである。

それゆえ、仲間等との相互行為や女性に対する態度、他民族に対する態度は、男らしさ (masculinity) のスタイルをとって現われている。集団の仲間等との相互行為は、身体レベルにおいてはふざけてではあっても一撃をくらわしたりするものであり、会話レベルでは辛辣な冗談を言い合うものであってもかなり荒っぽい。また、女性に対して高圧的に接することは、彼らにとってごく当たり前のことである。というのは、女性は弱々しく自立心に欠けているから、自分たちが面倒をみてやらなければならない存在だと彼らはとらえているからである。他民族に対する彼らの態度も、男らしさのスタイルの一つとなっている。なぜならば、「そんなことはありえないが、もし仮にほかの生き方があるとしたら、その時は男らしいということのほかの在り方が存在するということになる。そうするとこれらが、自分たちの男らしさよりもすぐれているということもあり得る」<sup>(12)</sup> ということは、断じて認めるわけにはいかないからなのだ。つまり、彼らにおける自民族中心主義は、真に男らしいのは自分たちだけだという自負にその根を持っているのである。

彼らの主要な文化的物たるバイクと音楽 (ロック) はそのようなスタイルと深く関わっている。彼らは、唯々諸々と文化的物を受容しているのではない。自分たちの文化の表出のために積極的に利用し、場合によっては変化させることもある。そして彼らの集団とバイクやロックとは弁証法的に関連し合っている。まず、「彼らの文化の主体的意志に必ずかつ具体的に応答」<sup>(13)</sup> する文化的物であるバイクについてみることにしよう。バイクは、彼らの服装や走行方法にまで影響を与える。例えば、スピード感を直に体験するために、ゴーグルや手袋を身につけず、ジャケットを開いたままにしておく。そして、凄まじい排気音を耳にし、それに触発され沸き起こる興奮を味わうことができるように、ヘルメットを被ろうとしない。そのような格好で疾走することで、荒々しさや他者への威嚇というバイクが持つ性質が一層増幅される<sup>(14)</sup>。その反面彼らは、手を加え改造することでバイクに対して影響を与える。高いハンドルバーに取り替えることで、空気抵抗が増し実際のスピードは落ちるが、それによって却ってスピード感が増大し、かつより熟達したハンドル操作を求めるようになる。クロームメッキの排気管とがっしりした泥よけは

荒々しい力を誇示するし、消音装置を取り去った排気管はその轟音で周囲を驚かせる——このように非人格的な狂暴性を人間の感覚領域に持ち込むことが可能となる<sup>(15)</sup>。以上のようにしてバイクは、「彼らの社会的相互作用のスタイルにある男らしさの独断性や荒っぽい友情、言葉の力強さと調和しそれらを象徴する」<sup>(16)</sup> 事物となっているのである。

音楽に対する彼らの選好もその文化の独自性と関わっている。彼らは、最近のヒットチャートには見向きもせず、10 数年も前に流行った初期のロック、すなわち Elvis Presley や Buddy Holly 等の 50 年代後半の曲を聴く。そうした彼らの「音楽の好みは、ロックの音楽的スタイルの基本的諸要素への同一化に客観的にもとづいていた。ロックは、構成の弁別性や一貫性、テクニクの特有かつ調和した使用、個人は解放されるという新鮮さや確信、『黄金の』『これっきりの』時代のセンスを有しているので、彼らのバイク文化の安定性 (security) や真正さ (authenticity)、男らしさ (masculinity) と一致し発展させることができた」<sup>(17)</sup> として、ロックという音楽の特質と彼らの集団の文化的価値がどう呼応しているのかを Willis は分析する。

まず第 1 に、彼らの文化の真正さや安定性とロックとの関連性についてみる。彼らにとって、Presley や Holly のオリジナルは価値を持つもので、その当時の 45 回転のレコードを好んで聴く。なぜならば、シンプルで力強いリズムと激しい歌い方を主軸とする表現形態という初期のロックのスピリットをこれらの曲が有しており、それこそが彼らにとって真正なものだからである。その上、初期のロックンロールが、motor-bike boys にとって真正な (authentic) 潜在的意味を歴史的に付与された<sup>(18)</sup> という歴史的条件が関わってくる。つまり彼らが聴くロックは、親の世代の音楽とは異なり、暴力的なまでに活動的でセックスアピールが強く、そのことが伝統的な価値を破壊するという社会的意味を帯びている。そうした暴力や攻撃性、反社会的感情で特徴づけられるロックが、音楽の一つのジャンルとして彼らにとって利用可能なものとなったのである。以上のように、「ロックのこのような『二重の対応性』、すなわちロックの先在的な社会的浸透とその特有な客観的構造は、motor-bike boys のロックへの傾倒を十二分に明らかにする」<sup>(19)</sup> のだと Willis はとらえている。

第 2 に、活動性 (movement) といった文化的価値との関わりはどうか。活動性が退屈に対する解毒剤ともなり得るので彼らはそれを重視する。初期のロックの特徴の一つであるビートの卓越性がこの点と関連している。というのは彼らが聴くロックは、「大胆さや活動性にもとづくライフスタイルをある特有の方法で反映し、反響させ、発展させる能力を明らかに持っている」<sup>(20)</sup> からである。つまり、ビートの早さと明快さを特徴とするそうしたロックは、彼らのせわしない活動性にふさわしいものなのである。しかも、ビートがヒエラルヒー化されている小節構成を構造的特徴とするクラシック音楽とは異なり、どの小節でもリズムを等しく刻むことによって、ロックは、秩序化された時間意識の破壊を意味すると Willis はいう。その上メロディーに重きを置かないので、ブルジョア美学のように全体として理解される必要がなく、好きな部分だけを聴かれたり途中で打ち切られても十分鑑賞に耐え得る構造になっている。ここでもやはり時間に縛られることがなく、聴く側の自由度が増す。こうした特質を持つロックは、彼らが職場で直面する、資本主義的な産業時間の観念を破壊する試みを反映しているというのである<sup>(21)</sup>。また、LP よりもシングル盤を好むということも、彼らの文化的価値としての活動性と関係している。じっと座って他の活動に没頭せず、音楽そのものを味わうことになかなりの時間をあてる余裕があるというライフ・スタイル——LP が示すこうした共示義 (connotations) は、彼らのライフ・スタイルとは相容れない。なぜならば彼らのライフスタイルは、動き回り、他の活動に没頭するものであるし、

かつ例えば曲に合わせてダンスをするように音楽に対して応答的だからである<sup>(22)</sup>。

第3に、彼らの文化の中軸にある男らしさとはどう関わっているのか。例えば Presley のように、曲が醸し出す雰囲気や彼のイメージは男性優位を表出している。すなわちこれらの音楽は、motor-bike boys の文化にとって基本的な特有の大胆さや男性的な活動性に対して応答的なのである。

ところで、バイクとロックは、彼らの文化的価値との関わりの中でバラバラに並存しているのではない。両者は関係し合っている。例えば、頭の中で刻まれるリズムは、バイクで疾駆することを鼓舞するし、逆にバイクで疾駆することはロックにおける同様の性質に集約される。つまり、バイクとロックとは感情レベルで接合 (articulation) しているのである。先に述べたように、集団と文化的事物であるバイク・ロックとはそれぞれ弁証法的に関連している。これら三者の関連性には、基本的な homology (相同性) がある。それが、男らしさ (masculinity) であって、それは「彼らの文化を全体として一般化した質」<sup>(23)</sup>なのである。

では、このような男らしさのスタイルが意味するものは何か。それは、抽象化の否認・具体性の尊重である<sup>(24)</sup>。例えば、他民族に対する中産階級のリベラル派が取る対応への motor-bike boys の見方にそれが現われている。一見すると、中産階級のリベラル派よりも、彼らの方が他民族に対して冷淡かつ侮蔑的にみえる。しかし彼らにしてみれば、他民族に対するリベラル派の思いやりというもの、知性に訴えるが感情に根ざしてはいないので、実際は作り事であって自分たちよりも侮蔑的だということになる。Willis は他民族の集団のなかには、両者のうちでどちらがまだましであるかということになれば、「知的なりベラリズムという作り事の気遣いよりも、偏見という十分に血の通った嫌悪の方を選ぶ」<sup>(25)</sup> 集団もあることに注意を促している。なぜならば他民族からすれば、中産階級のリベラリズムは、思いやりという衣の下に文化的な帝国主義を忍ばせており、自分たちの文化を低く評価しかつ侵害しようとするが、motor-bike boys の場合は境界線を越えることがないからまだよい、ということになるからなのである。motor-bike boys は、知性に依拠して抽象化に傾倒する、中産階級の思考に潜む欺瞞性を問題にしているといえる。

今までみてきたように、彼らの具体的な行動や文化のスタイルは、一般社会、とりわけ中産階級の価値規範に対して冒瀆的である。しかしながら彼らは、社会の諸構造の再生産に予期せずに与してしまう。その契機は、次のような女性に対する態度や民族差別、労働に対する態度にあると Willis は指摘する——「女性子どもと家にいるべきで、外での活動が制限されるのは当然だ。(自分たちも罵り言葉を使うにもかかわらず) ほかの民族が罵り言葉を使うことを許すことはできない。「報酬は、公正な努力に対して払われる」<sup>(26)</sup> のだから、産業は概して公正だ。上の地位につく人たちは、個人的に人柄が優れているのだから、そのような地位にあるのは半ば当たり前だ。」——こうして一般社会の見方と一致するのである。

しかし、再生産の契機はこれだけではない。「勇気や男らしさ、周りに対して誇示することの究極の象徴的集約」<sup>(27)</sup> であり自分たちの文化の中核にある死というものを、認知し、集団の神話に仕上げる自前のしきたりや規則を彼らは何ら持ち合わせていない。それゆえ、フォーマルな認知を求めて彼らは教会の儀礼を借用する。「伝統的で社会的に受け入れられた形態と現代的でインフォーマルな形態との非常に特異な結合 (very special conjunction)」<sup>(28)</sup> によって、彼らはここでも一般社会とつながるのである。更に、ニュース・メディアも援用する。この地方の新聞は、服装など外観が「女々しい」として彼らが見下す、mods の文化的事物であるスクーターによる事故死を取り上げないのに対して、彼らの文化的事物であるバイクによる事故死については報道する。

それだけ自分たちの方が優位にあると彼らは自己評価する。しかも、バイクによるメンバーの事故死に関する記事はスクラップされ、それをめぐって語られる。このように地方紙というメディアを借用することも、仲間の死を神話化することに作用する。こうして、一般社会の機関の一つである報道機関を、彼らははからずも追認するのである。

彼らは、一般社会を侵害しようとする。しかしその営みは、表層レベルで行なわれているため、根本的な政治的挑戦とはならない。つまり、文化のレベルでの抵抗であって、そこから階級制の变革を企図するような政治的实践にまでは至らないという“弱点”を持っているのである。

### 3 Paul Willis における社会集団分析の方法論

彼の社会集団論の特徴としてまずあげられることは、社会集団における個々人の認識や行為ではなく、社会集団そのものの主体性たる文化に彼の関心が注がれている点である。それは、「社会集団によって共有化され維持され再生産されるもの——それは漠然とした個人の意識とは異なっているが——それが主体性 (subjectivity) という私の概念において重大な焦点であ」<sup>(29)</sup>り、「私の関心の焦点は象徴システム・諸活動・諸価値の主体性であって、個人的人間ではない」<sup>(30)</sup>という言葉に端的に示されている。なぜ彼はそう考えるのか。それは、社会的文化的実践という経験を生み出すのが、ある特定の社会的物質的基盤の中にある社会集団において繰り広げられる相互作用であって、個々人ではないと考えているからである。しかも、「そのような集団は、文化的実在物の最小単位である。それは、支配的文化に対して抵抗する最小単位であり、個々の諸主体者を保護したり、彼らに影響を与える直接的な形態である」<sup>(31)</sup>。このように、個々人と社会との接合点 (articulation) である社会集団の主観的次元である文化を対象とするのである。

そうした社会集団の文化が、それを取り巻く状況や事物と弁証法的に関連し合っていることを強調しているのも彼の社会集団論の特徴である。つまり、文化の本質は、そのような弁証法的な文化的諸関係 (cultural relationships) であり、「人間の主体性 (human subjectivity) 及びその特徴の構造とそれらが置かれている文脈との間の真の交換や物質的な弁証法を示唆する」<sup>(32)</sup>というのである。その文化的諸関係は、索引的方法 (the indexical mode)、相同的方法 (the homological mode)、統合的方法 (the integral mode) の3つの方法によって分析されるべきだとする。以下、その概略を述べよう。

#### (1) 索引的方法 (the indexical mode)

索引的方法 (the indexical mode) では、外部の事物が社会集団と量的な意味でどれだけ関連し合っているのかを問題にする。例えば、当該集団がロックを、どこでどれくらいの時間聴いているのか、その頻度はどの程度かといった具合である。つまりこの方法の目的は、「外部にある事物がどの程度、社会集団の索引に乗せられるのか (are 'indexed') を判断すること」<sup>(33)</sup>であって、各々の事物との接触時間や頻度の違いが意味することを分析することではない。

実はこの索引化される関係は、国家や機関などによってイデオロギーが個々人に浸透する過程でもある。この点については、「(3)統合的方法」の所で述べることにする。

#### (2) 相同的方法 (the homological mode)

相同的方法 (the homological mode) は、索引的方法が確認した文化的諸関係の差異を問題にする。すなわち、「個々の事物がそれらの構造や内容において、社会集団の構造やスタイル、特有

の関心事、態度、感情とどの程度一致し反映するのかが問題にする」<sup>(34)</sup> ことがその目的なのである。事物の中でも、社会集団との弁証法的な連関において、上記の事柄と一致しそれらを反映するような特定の事物がある。motor-bike boys の場合、そのような特定の文化的事物はバイクと初期のロックンロールであった。そうした事物は社会集団における、「特種な社会的アイデンティティと、特種な感性の実践・適用とを支持し反響し、具体化するのを促すに違いない——意識的にも無意識的にも、自発的にも自動的にも」<sup>(35)</sup>。「このような事物はすべて、社会集団の『文化領域』(cultural field)を構成する」<sup>(36)</sup>のである。しかも、「蓄積されコード化されたイメージ(stored and coded image)が文化領域のなかに安全にしまい込まれているので、社会集団は逆転した弁証法的モメントにおいて、おそらくは広がりつつある芸術の諸形態や文化的事物、対象の領域(circle)との交渉で、その集団自身の文化領域から学びその影響を受けることができるし、その集団の感情や態度、好み、そしてとりわけ集団自身とその必要性によって設定された傾向性を発展させることができる。こうして内在的に幾分変えられるので、社会集団は、その文化領域の構造と形態を組み直すために、それに続いて一層真正さを確認する弁証法の回路を設定するために、さらに新たな事物を選定したり、元々あるものから選んだりあるいはそれらを変化させることができる」<sup>(37)</sup>。つまり、それまで外部に存在する単なる事物だったものが、社会集団の文化的関係を通して文化的事物となる。そうした文化的事物によって構成されるのがその集団の文化領域であり、それは、外の事物と連関することができる。社会集団と文化的事物・文化領域とは、motor-bike boys とバイク・ロックンロールとの関係がそうであるように homological な関係にあるので、社会集団は文化的事物を介して外の世界を理解し、更に集団の感情や態度などを発展させることができる。すなわち社会集団の認識行為は、外の世界とつながっているのであって決して閉鎖的ではない。こうして社会集団は、一般社会における自らの存在条件や矛盾を把握することができるのである。しかし、それは必ずしも意識的に行なわれるとは限らない。無意識的にも行なわれ、集団の構成員が驚くような結果に終わることもあり得る。かように社会集団とその文化領域との連関は複雑なのである。

そのため、社会集団と文化的事物との間の文化的諸関係に関する相対的分析は、その生成から変化する過程を説明し得るものでなく、一定時間内に確認された「文化的関係の複雑な質的狀態を記録する」<sup>(38)</sup>ものであり、その意味では共時的であり解釈的でもある。「行為者たちによる言語表現と彼らの行動・相互作用との間、及びこれらと、文化領域における事物の特徴的な使用や発展だけでなく肉体的スタイル・表現という様々な文化諸形態に持ち込まれた象徴的意味との間に矛盾が存在することはよくあるだろう」<sup>(39)</sup>と考えられ、これらの矛盾をどう解釈するかがこの分析のポイントとなる。そこで、相対的に独自の実在物である社会集団と文化的事物のそれぞれの検討に相対的分析は分節化される。

社会集団の検討には、エスノグラフィックな方法が取られる。なぜならば、社会集団の感性や価値、態度の構造は、直接的に表現されるのではなく、媒体や文化的事物を通して表現されるため、その分析は困難を極めるからだとして Willis は考える。そうした媒体物は現実をゆがめて表現することがあるため、それを極小化することがここでの主要な課題となる。文化的事物の検討にも困難が伴う。「異なる社会集団が同じ文化的事物に関わるものの、そこから異なった homological な意味や効果を得る」からであり、その上「ある特定の社会集団がある特定の事物からつくるものが時を経て変化することがあり得る」<sup>(40)</sup>からである。他方、文化的事物の意味が形成される範囲には限りがある。それが、「客観的可能性」('objective possibilities')である。

そこで彼は、参与観察を主としたエスノグラフィックな方法による社会集団の分析と文化的事物の「客観的可能性」の分析が求められるとする。まず、前者からみていくことにしよう。それは、次の3つの方法からなる。すなわち、「自然の状態を把握すること——自然的手法」(Holding to the natural——the naturalistic technique)、「資料の基準線をクロスすること——比較的手法」(Cross-gridding of evidence)、「自己反省的手法と分析のモメント」(The self-reflexive technique and analytic moment)がそれである。まず最初に、「自然の状態を把握すること——自然的手法」についてみよう。行為者が構成する自然な状況の中で調査を行なうことができるということは参与観察の利点の一つだと Willis はいう。そこでは調査者は、とりあえず理論構築を停止して、まずその場に慣れてから然るのちに資料を集めるようにし、また集団の活動へは加わらないようにすべきだとする。ここでは、集団面談がキーとなる。それが、データの源泉となるだけでなく、データの信憑性の解析につながるからである。というのは、集団面談で提示される共通認識には、構成員の誰かが語る、それとはまったく異なる作り話が介入する余地がないからである。こうして「歪み」をある程度減じることができるとする。

それでもやはり、バイアスが全く無くなるわけではない。そこで第2に、「資料の基準線をクロスすること——比較的手法」が適用される。これは、様々な方法を用いていろいろな状況下でデータを収集し、異なる種類のデータ間に生じる矛盾に気付くことである。例えば、個人面談で得たデータは、集団面談で得たデータや観察によって得たデータと矛盾することがある。「言語は一つの記号 (a code) であって、現実の直接的表出ではない」<sup>(41)</sup> からである。そのため調査者は、あらゆるコミュニケーションに対して開かれていて、異なる記号間の潜在的矛盾と、異なった記号でコミュニケートされた本質的な意味の間の潜在的矛盾に対して開かれている必要がある。「ある特定のパターンが一連のデータから浮かび上がると、様々な方法で集められた資料は『自発的に』、発展途上にある主題と矛盾し、そしてその資料が誤って記録されたゆがめられた様式やあるいは誤った解釈をされた様式を示すかもしれない」<sup>(42)</sup> ということは、開かれた態度で様々な方法を用いることによって促されるからである。そのような方法として Willis があげているのは、参与観察の他に観察 (observation)、ただその辺りにいること (just being around)、集団面談 (group discussions)、録音された集団面接 (recorded discussions)、個人面談 (informal interview)、既存の調査票の使用 (use of existing surveys) である。同じ場に関係している事柄をこれらの方法を用いて cross-gridd することで、それらの矛盾を認識し文脈化することが求められるとしている。

それでもなお「歪み」は残る。例えば、調査者にとっての「常識」が、それとは異なる対象者の「常識」と直面して混乱する場合がある。そうになると、現実を正確にとらえることができないので、分析にある種の歪みが生じる。従来方法では、客観性の名の下にそれ以上踏み込むことができないとされてきた。しかしそれはむしろ、「二つの主体的な意味構造の明らかな交差の所産として、より創造的にみなされる得る」<sup>(43)</sup> と Willis はいう。なぜ、彼はそう考えるのか。それは、こうした交差で生じる葛藤が、調査者と対象者それぞれの感情や意識、思考の日常化された諸構造の差異を理解するのに意義あるものだからである。そこで第3の「自己反省的手法と分析のモメント」が発揮される番となる。このモメントは、「調査者が、自身の社会的諸パラダイムと理解したいと思っている人々のそれらとの交差を反省的に分析する能力に関わっている」<sup>(44)</sup>。すなわちこのモメントにおいて、対象者にとっての現実と調査者のそれとの偏差を調査者が意識し解析することによって、両者の位置関係を地図化するというのである。彼は、「共感」という言葉でし

ばしば語られる、調査者による対象者の経験そのものの再経験は不可能だと考える。それは却って、対象者の社会的世界を見誤らせることになるからである。問題は、対象者の経験と調査者のそれまでの経験内容とがどう矛盾するのを感じ取り理解することなのである。こうした自己反省的手法は、自然的手法で収集したデータ、そしてそれらのデータを比較的手法でクロスした資料からまさに予感 (hunches) のように生じるとしている。彼が9カ月に及ぶフィールド・ワークによって得たデータは、以上のようなエスノグラフィックな方法で主要な分析に付されたのである。

では、文化的事物の「客観的可能性」についてはどうか。彼はいう。「文化的事物の重要性や価値、意味は社会的に付与されるが、その事物自身の内的構造、すなわち『客観的可能性』によって課された客観的な限界内においてである。社会集団との homological な社会的諸関係の中へ吸収されるのはその『客観的可能性』である。それらの関係は、内容の点ではなく、構造の点で十分に評価されるべきである」<sup>(45)</sup>。すなわち文化は、社会構造に対して相対的に独自であり能動性を持つ。しかし文化自身も、素材をもとに構成されるので、その意味では客観的構造を持つため、文化が能動性を発揮できるのは一定の枠内、すなわち文化的事物の「客観的可能性」という枠内においてなのである。「『客観的可能性』は、文化的事物のなかの何らかの物的なものと、限定され特異な、外から付与されたものではない何らかのものと関連しているので、新しい意味を提示することができるし、あるいは付与された意味を予期せぬ方向に影響を及ぼし発展させることも確かにできる。この不確定な過程は、文化の発生が起こるところの不確実性という中核にある」<sup>(46)</sup>。しかし、その範囲には一定の限界がある。過去に「客観的可能性」から作られたものは、最近それら「客観的可能性」から取り上げられたものに対する制限となる。つまり「客観的可能性」から構成される意味は歴史的制約を受けているといえる。

「客観的可能性」は歴史的制約だけでなく、社会的制約も受けている。支配的文化は、重要な文化的事物との関係性に存する潜在力を優先的に利用できる社会的位置にあるので、従属的文化はそれ自身の意味を生み出すために、同じ文化的事物の中に軽んじられたり人目につかなかった可能性を探索しなければならない。あるいは、「支配的システムによって提供されたが文化的にはそれほど利用されていない、新しい対象物の『客観的可能性』を創造的に開発すること」<sup>(47)</sup>が必要となる。そのため、従属的な位置にある社会集団が使用する文化的事物は、支配的文化に照らすと冒瀆的なものとなるのである。

### (3) 統合的方法 (the integral mode)

統合的方法は、基本的な homologies の産出を説き明かすことを目的とする。そのため、通時的分析が行なわれる。具体的には、「ある文化的関係のなかの二つの要素が互いに直接どの程度影響を与え合い、どの程度部分的に変化させ合うかを調べる」<sup>(48)</sup>とする。つまり、文化的事物の「客観的可能性」と社会集団との弁証法的関係を問題にするというのである。「文化的事物の中のその可能性 (=『客観的可能性』) における限度ぎりぎりの組直しは、社会集団 (の感性や感情構造、特有の関心事) における限度ぎりぎりの組直しを引き起こすが、そのことは社会集団からの作用がある限り、その可能性における一層の変化を引き起こす」<sup>(49)</sup> というように両者は弁証法的に関連している (括弧内は筆者)。「客観的可能性」における変化は、社会集団による既存の事物からの選択 (selection) や社会集団による新たな事物の創造 (creation) によって引き起こされる。motor-bike boys の場合は、前者による変化過程を辿るとする。統合的方法は、「homologies が、規定条件下で如何にして生じるのか、そしてまた、文化的事物の『客観的可能性』自身が如何にして変

えられ、人間と社会集団に対して如何に応答的であるのか(中略)を歴史化する」<sup>(50)</sup>ということでもある。かような意味で、この方法は通時的分析なのである。

社会集団は、文化的関係の索引的領域 (its indexical field) における、文化的事物との関係性に対する一方的な意味確定に左右される。それは、意識レベルよりはむしろ無意識レベルで引き起こされる。つまり、イデオロギーの浸透を受けるということである。一方、社会集団の文化には、その外の出来事や諸構造からリンクし、その文化固有の関心事を中心からずらすよう働きかける「文化的政略」(cultural politics) が関わってくる。その上、「客観的可能性」には左右されない内的構造があるため、文化領域は社会集団の完全な表現形態とはならない。しかしながら、こうした制限要因がありながらも、支配的文化に対する抵抗としての冒瀆的要素のおかげで、統合的な文化諸関係は崩壊の危機を免れているとしている。

#### 4 おわりに

以上、*Profane Culture* における Willis の社会集団論についてみてきた。最後に、その特徴について述べることにする。まずあげられることは、その分析射程である。社会集団内の face to face の関係レベルのみを問題とするのではなく、それを取り巻く一般社会との関わりまでもとらえようとしている。一般社会に対して、motor-bike boys は冒瀆的な文化によって反抗する。しかし、一般社会の再生産に与してしまうという弱点を持っている。そのような契機として、労働に対する態度や性差別、民族差別に焦点を当てるという分析視角は、*Learning to Labour* にも引き継がれている。「抽象性の否認・具体性の尊重」という彼らの文化の主要な価値は、*Learning to Labour* における労働論の基軸を成している。しかし、*Learning to Labour* における労働論は、Braverman 労働過程論<sup>(51)</sup>を受容することで *Profane Culture* の場合と異なる論理展開をしている。すなわち、反学校的集団である〈野郎ども〉の文化は、どのような労働も総じて意味に乏しいと判断する。それは、Braverman が明らかにした、「人間労働が〈抽象的労働〉として等しく搾取の源泉となる」のであって、あらゆる労働は意味を失っているという、独占資本段階における労働の特質(「労働の衰退化」)を洞察しているというのである<sup>(52)</sup>。そして「留保された少年たちの固有の能力は、生産労働とは別の位相にある彼ら自身の欲求や目的を満たすために生かされることになる」<sup>(53)</sup>——つまり、肉体労働を独特のやり方で遂行しつつ、職制と対立する「俺たちの」職場文化の形成へと向かうのだとする。このように *Learning to Labour* では、社会集団における労働力認識の解明に収斂しており、社会集団と文化的事物との関連性という *Profane Culture* の中心課題が後景に退いている。

次に方法論的特徴についてみる。文化の能動性を、その存在条件との弁証法的関係の中で論じている点があげられる。とりわけ社会集団と文化的事物の弁証法的関係が中心に据えられている。社会集団は、置かれている社会的位置に規定されているため、利用し得る文化的事物の選択に限界があった。しかも文化的事物自体にも独自の内的構造があるため、社会集団がその事物に意味付与できるのは「客観的可能性」の枠内に限定される。しかし、そうした制約を受けながらも、文化は洞察力を持つことができると Willis はいう。そうした文化を解明するために、connotation (共示義) や code (記号) といった記号論的概念や homology 概念を駆使している点も見逃せない。というのは言語よりも、むしろその他の記号の方が彼らの文化の表象形態となっているからである。

エスノグラフィックな方法で特徴的なのは自己反省的手法である。調査者が対象者と「共感」で

きるとするのは欺瞞的だと彼は考えている。しかしそのままでは、調査者の側から理解できない対象者の「影の」現実には「影」のままにとどまる。彼はこうした両者の偏差を、対象者の現実に接近する絶好の考察対象だととらえかえす。両者の位置関係を地図化することで、「常識」という日常性の論理に深く結びついているがゆえに理解しがたい領域をなんとかとらえようとする。ここでは、決して調査者の一方的な決め付けはなされない。つまり、学問知が高見に立って民衆知を裁断したりはしない。学問知が、どこまで民衆知に接近し得るか、その重要性を彼は認識しているといえるだろう。すなわち、学問知が、民衆知を媒介にして自らをとらえ返す、そうした自己反省的認識によって、自らを異化することが必要だということである。

確かに motor-bike boys の文化は、一般社会の価値規範、すなわち支配的文化に反抗するものの、他方でそれを黙認・追認してしまう。つまり、従属的な位置にある集団の文化という能動的契機が支配的文化に対して反抗するものの、それは社会集団というインフォーマルな砦に立てこもってなされる反抗であって、代案を持ち合わせていないし、あるいはそれを構築しようとする実践にまでは至らないということである。ここでは、社会変革を目指して政治的实践を行なうという「階級意識に目覚めた労働者階級」像は見当らない。がしかし、それが現実の労働者の姿の一端を示しているのである。

しかしそのことは、彼らが支配的文化に対して受動的であり、それに屈服しているということの意味しない。Willis が motor-bike boys を評価する点はそのにある。なぜならば彼らは、支配的文化・イデオロギーに操られている「かも」(fall guys)ではなく、自前の文化を形成している。しかもそうした文化は、文化的諸関係を通して自らを取り巻く状況や自らの存在条件を認識し、社会に存する矛盾を見抜く洞察力を持っているからである。それゆえ、Willis は、motor-bike boys の文化に学ぶべきだとする。

筆者が、Willis に注目するのはこの点にある。支配的文化とその存立条件を相対化し、それに対する代案としての文化を打ち立てるような抵抗の文脈を形成することは、確かに困難である。そうした行為を行なう民衆の文化自体にイデオロギーが浸透しているからである。しかし、そうした浸透と自らの文化固有の問題性から生じる制約の影にまわりつかれながらも、民衆文化は社会構造や社会秩序に存する矛盾を洞察することができる。そうした営為の初発は、「単に、そのために組織された集団に関わる問題ではない。それは、思考や感情、そして事物を如何にみるかということと関わる——すなわち、ありふれた事物に対して新たな眼差しを向けること (new eyes on old objects)」<sup>(64)</sup>だと Willis はいう。すなわち、日常性のレベルにおける「同化の中の異化」なのである。この点については、筆者も同様に考える。

しかし、以下のことについては Willis と筆者では見解が異なる。彼は、こうした「同化の中の異化」は個人レベルではなく文化レベルで生起すると考えているようである。このことは、先に述べたように、個人の意識ではなく社会集団の文化における能動性を問題とする彼の見方からもうかがえる。このような、個人ではなく文化にこそ能動性があるという考えは、*Learning to Labour* で一層明白となる。しかし、「同化の中の異化」は、まず個々人から発するものだと筆者は考える。それには、佐藤毅氏がいうように、「異化の目——異邦人の目が育つには、なによりも内なる自省作用 (reflexiveness) を喚起することが要請される」<sup>(65)</sup>。つまり、他者や他の事物を異化するには、自らを異化する自己反省的認識を働かせることが必要なのである。佐藤氏は続けて次のようにいう。「このような自省作用を媒介とする、“離見の見”つまり、自己内関係性の変換

が、聞から聴への転換、あるいは『図』と『地』のゲシュタルト転換を喚起し、一方でメディア言説の批判的対象化ないし異化媒介化、他方で単なる同化をこえた、メディア言説を『読み込む』ないし変換することの深化に結びついていく。そのことが既知のものの中にあえて未知のものを読むという意味での、『異化』の深化にも連なっていくにちがいない。そして、他者との新たな関係性への共起的変換が待っている」<sup>(56)</sup>(下線部筆者)。この指摘は、マス・コミュニケーションに対する「読み手」の認識行為について論じたものであるが、パーソナル・コミュニケーションについても当てはまると考える。すなわち、他者や事物を異化することは、自己反省的認識を媒介として、まずは個々人において生起する。それから、他者との関係性の中で、共起的に異化が喚起する過程を経ることによって、異化的認識が文化の機能となるのだということである。「同化の中の異化」を通して、洞察力がどのように形成されるのか、その過程が *Profane Culture* でも *Learning to Labour* でも不明瞭なのはこの点にかかっているのではないか。

筆者は、文化研究として、Willis の論理展開をとらえることが、彼の所論を考察する有効な視角の一つとなると考え、本論文では、そのための基礎作業として、彼が文化研究として自らの問題関心に即して対象設定し方法論を立ち上げた、言わば“原点”ともいえる *Profane Culture* の内在的理解を試みた。彼の文化研究は、Stuart Hall の理論に依拠している。それゆえ、Hall の理論との関連性に留意しつつ、*Learning to Labour* 以降の作品をとらえ返すことが今後の課題として残されている。別稿を用意して吟味したい。

#### 〈注〉

- (1) Willis, Paul (1977), *Learning to Labour*, Gower (熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房, 1985年).
- (2) Willis, Paul (1978), *Profane Culture*, Routledge & Kegan Paul.
- (3) *ibid.*, p.2.
- (4) *ibid.*, p.1.
- (5) *ibid.*, pp.1-2.
- (6) *ibid.*, p.6.
- (7) *ibid.*, p.11.
- (8) *ibid.*, p.11, cf. Willis, Paul (1973), "The Triple X boys", *New Society*, No.547.
- (9) Willis, Paul (1978), *op. cit.*, p.16.
- (10) *ibid.*, p.20.
- (11) *ibid.*, p.23.
- (12) *ibid.*, p.33.
- (13) *ibid.*, p.16.
- (14) *ibid.*, pp.53-56, cf.
- (15) *ibid.*, pp.56-57, cf.
- (16) *ibid.*, p.53.
- (17) *ibid.*, p.63.
- (18) *ibid.*, p.66.
- (19) *ibid.*, p.66.
- (20) *ibid.*, p.67.

- (21) *ibid.*, pp.76–79, cf.
- (22) *ibid.*, pp.69–70, cf.
- (23) *ibid.*, p.72.
- (24) *ibid.*, pp.13–35, cf.
- (25) *ibid.*, p.35.
- (26) *ibid.*, p.49.
- (27) *ibid.*, p.57.
- (28) *ibid.*, p.59.
- (29) *ibid.*, p.193.
- (30) *ibid.*, p.194.
- (31) *ibid.*, p.194.
- (32) *ibid.*, p.189.
- (33) *ibid.*, p.190.
- (34) *ibid.*, p.191.
- (35) *ibid.*, p.191.
- (36) *ibid.*, p.191.
- (37) *ibid.*, p.4.
- (38) *ibid.*, p.191.
- (39) *ibid.*, p.192.
- (40) *ibid.*, pp.192–193.
- (41) *ibid.*, p.196.
- (42) *ibid.*, p.196.
- (43) *ibid.*, p.197.
- (44) *ibid.*, p.197.
- (45) *ibid.*, p.200.
- (46) *ibid.*, p.200.
- (47) *ibid.*, p.201.
- (48) *ibid.*, p.201.
- (49) *ibid.*, p.202.
- (50) *ibid.*, p.202.
- (51) Braverman, H.(1974), *Labor and Monopoly Capital*, Monthly Review Press (富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店, 1978 年, p.55, pp.90–91, pp.126–136, pp.188–202, pp.340–352, pp.367–377, pp.397–398, pp.402–404, pp.442–443 を参照).
- (52) Willis, Paul (1977), *Learning to Labour*, Gower (熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房, 1985 年, p.272 を参照). フォード的生産様式段階では、「実行からの構想の分離」による「労働の衰退化」論は妥当性を持っていた。しかし、脱フォード的生産様式段階では、労働は「衰退」するのではなく、「構想」の「実行」への部分的結合によって、より多くの剰余価値取得を企図する経営戦略が取られている。その意味でも、Willis の所論は批判的に吟味されなければならないと考える。
- (53) 前掲翻訳書, p.278.

- (54) Willis, Paul (1978), *op. cit.*, p.7. この考えは, Brecht の異化論と重なる (ブレヒト『演劇論』ダヴィド社, 1963 年, pp.55-56, pp.70-74, pp.109-110 参照)。この点については, 佐藤毅氏「異化媒介的コミュニケーション」(同『マスコミの受容理論』法政大学出版局, 1990 年) から示唆を受けた。
- (55) 佐藤毅, 前掲書, p.256。
- (56) 佐藤毅, 前掲書, p.257。